様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　７ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ００４４９

研究課題名（和文）C. M. ヴィーラントのコスモポリタニズムと同時代言説

研究課題名（英文）C. M. Wieland's Cosmopolitanism and Contemporaneous Discourse

研究代表者
菅　利恵（Suga, Rie）

京都大学・人間・環境学研究科・教授

研究者番号：５０５３４４９２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、18世紀コスモポリタニズムを牽引したヴィーラントの言説を精査し、その同時代的意義を明らかにした。まず、初期から晩年までのコスモポリタニズムに一貫した特徴として、社会や慣習から意図的に距離をとる「よそもの」の姿勢を抽出した。そしてこれが、彼のいまひとつの基本姿勢であった「言論の自由」の主張と密接に結びついていることを示した。さらに当時の代表的コスモポリタンとしてカントにも注目し、ヴィーラントとの比較を行った。その上で、しばしば理想主義的で観念的である点が批判されてきたコスモポリタニズムが、啓蒙の公共性の理念を意味のあるかたちで展開させるために、なくてはならないものだったことを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、ヴィーラントやカントの言説分析から、啓蒙時代にコスモポリタニズムが批判的知識人の拠点としていかに機能したのかを明らかにし、従来の「現実離れ」したコスモポリタン像を刷新することに成功した。また「よそもの」という観点からコスモポリタニズムをとらえ直したことによって、18世紀のコスモポリタニズムが「特定の社会や文化に包摂されない生のための思考」の端緒となったことを示すことができた。国際社会の欠陥があらためて露呈した現代にあって、共生への回路を手放さないための思考を鍛え直すことは急務の課題となっている。啓蒙時代のコスモポリタニズムは、この思考の基盤として今なお注目に値するのである。

研究成果の概要（英文）：In this study, I scrutinized the discourse of Wieland, the leader of 18th century cosmopolitanism, and clarified its contemporaneous significance. First, I extracted an "outsider" attitude that intentionally distanced himself from society and customs as a consistent feature of his cosmopolitanism from his early years to his later years. I also showed that this was closely linked to his insistence on "freedom of speech," which was one of his basic stances. I also paid attention to Kant as a representative cosmopolitan of the time and compared him with Wieland. I showed that cosmopolitanism, which has often been criticized as being too idealistic and detached from reality, was indispensable for the meaningful development of the Enlightenment's idea of public sphere.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：コスモポリタニズム　ヴィーラント　カント　ドイツ啓蒙主義　公共圏

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近代化の過程で、ドイツ市民知識層の政治的な自意識がコスモポリタニズム(Kosmopolitismus ないし Weltbürgertum）に強く刻印されていたことは、フリードリヒ・マイネッケの『世界市民主義と国民国家』(1908)やハンス・コーンのナショナリズム研究をはじめ繰り返し強調されてきた。ドイツ語圏でコスモポリタニズムが大きな影響力を持ったのは 1760 年代から 1815 年頃までだったが（Albrecht 2005)、ナポレオン戦争とともに影響力を弱めたあともドイツ文化に一定の刻印を残し続け、二〇世紀に入ってからも、トーマス・マンなどがコスモポリタン的な傾向をドイツの国民性の重要な一部と見なしている。

この時代のコスモポリタニズムに対する従来の評価は両義的である。ゆがんだナショナリズムとは関わりの薄い過去として持ち上げられることもある一方で、市民知識層の非政治的な態度を強化させたというマイネッケの評価が受け継がれ、具体的な政治認識に根ざしておらず、現実と切り結ぼうとしない観念的な営みと見なされがちであった。周知のとおり、啓蒙時代に市民知識層が置かれた政治的、社会的状況はきわめて閉塞的なものであったが、ヴィーラントを中心に当時のコスモポリタニズムを研究したザームラントは、こうした状況こそをコスモポリタニズム流行の背景と見なし、これを一種の現実逃避的な代償行為としてとらえた。(Irmtraud Sahmland: Christoph Martin Wieland und die deutsche Nation. 1990) 当時のコスモポリタニズムが単なる「逃避」や「代償」以上の機能を持ったとすれば、それはどのような意味においてだったのだろうか。本研究の中心的な問いは、啓蒙の土壌の上に政治的自己像を組み立てようとした人々にとって、コスモポリタニズムが果たした役割がどのようなものだったのか、というものである。

２．研究の目的

本研究の目的は、おもにヴィーラント Christoph Martin Wieland の言説を中心として、1800 年前後におけるコスモポリタニズムの実相と意義を明らかにすることである。ヴィーラントの言説を当時の愛国の言説や他のコスモポリタン的言説と比較検討することを通して、コスモポリタニズムが市民知識層の政治的な自意識形成の過程で有した意味を考察する。さらにそれを通して、18 世紀のコスモポリタニズムの現代的な意義を抽出する。

３．研究の方法

まず（１）社会契約論の言説、および（２）愛国の言説との比較検討を通してヴィーラントのコスモポリタニズムの輪郭を明らかにし、彼のコスモポリタン像に特徴的な「孤立」という側面を精査する。その上で、カントのコスモポリタニズムを考察対象に加えて、（３）コスモポリタニズムと市民的公共圏の理念との結びつきを示す。研究の各段階の具体的内容は以下の通りである。

（１）社会契約論の言説との比較

17 世紀以降の社会契約論の系譜の中でヴィーラントの言説をとらえなおす。彼の市民社会論やコスモポリタニズム をめぐる言説を、自然状態と市民社会の形成にかんするルソーの論考との比較において分析する。

（２）愛国の言説との比較

従来の研究において、ヴィーラントらによる啓蒙時代のコスモポリタニズムは、当時のパトリオティズムとも多くの共通性を持ったことが指摘されてきた。確かに当時のパトリオティズムはコスモポリタニズムと同様に「自由」や「普遍的人間」という啓蒙の諸観念に基づいており、両者は多くの部分で重なっていた。しかし本研究では、コスモポリタニズムを特にユストゥス・メーザーによる文化多元主義的な愛国の言説と対比させ、それを通して、「孤立」を辞さないコスモポリタニズムと愛国の言説との違いが、なによりも共同体の内部における「同質性」の要請の有無という点にあったことを示す。

（３）市民的公共圏をめぐる議論との接続

１)、２）の研究においては、ヴィーラントのコスモポリタン像を「孤立」というキーワードから分析し､所与の社会から距離をとるその基本姿勢に注目してきた｡この姿勢の社会的な意義を、特に「言論の自由」という観点から考察する。ヴィーラントは、コスモポリタンとしての立場からしばしば言論の自由を主張していた。個人が孤立したまま、すなわち共同体に同一化しないままこれに関わるひとつの可能性として、彼は自由な言論空間における言論活動を考えていたのである。本研究では、言論の自由に関する彼の主張が、彼のコスモポリタニズムとどのように関わっているのか詳しく示した上で、同時代に同様の主張を行ったカントの言説にも目を向ける。ヴィーラントとカントの言説を手がかりに、孤立した理性主体による自由な発言の場の確保ということが、当時の公共圏の理念において有した意味を明らかにする。

４．研究成果
上記の各研究により得られた成果は以下のとおりである。

（１）社会契約論の言説との比較
「自然状態」を想定しつつ、「社会契約」を通した市民社会の形成を考えたルソーの言説が、個々人の「市民」としての主体化を前提としたものであったのに対して、ヴィーラント の市民社会論においては、「自然状態」（ヴィーラント の場合これ自体ルソーとは異なり「社交的な」ものとして想定されている）の道徳的価値を体現した「人間」としての存在形態を維持することが構想されている。彼の「世界市民」の観念は、「市民」に回収されない「人間」という存在形態の肯定的な具体像にほかならない。本研究では、ルソーの市民社会論との比較検討を通して、「市民」であることから意図的に距離ととるという意味での「孤立」にヴィーラントが特別な道徳的意義を与えていることを示し、これを彼のコスモポリタニズムの中核として提示した。この研究成果をまとめた論文の一つである「市民，人間，世界市民―ヴィーラントのコスモポリタニズムと市民的公共圏」（『ドイツ文学』160 号）は、その学術的意義を評価されて 2022 年第 19 回日本独文学会・DAAD 賞を受けた。

（２）愛国の言説との比較
（１）で論じたように、ヴィーラントのコスモポリタニズム は、自らが組み込まれた政治的、また文化的な文脈からあえて一定の距離をとり、そのことによって知識人としての道徳的、批判的立場を維持しようとする立場としてとらえることができる。このような立場が持った同時代的な意義をより明確にするために、ユストゥス・メーザーによる愛国的言説と比較した。メーザーは、オスナブリュックを地盤として活躍し、地方に根ざした経済体制や文化の重要性を説いた。個々の場所に蓄積された文脈に注目し、その上にしか豊かな文化や社会は構築し得ないと説いた彼の議論は、ヘルダーとともに 18 世紀後期ドイツ語圏における文化的多元主義の潮流を形作っている。本研究では、『郷土愛の夢』を中心とするメーザーの社会論、文化論を分析し、彼の文化的多元主義の射程の広さを確認するとともに、その問題性をも指摘した。すなわちメーザーの言説においては、地域に根ざした文化の多様性が尊重される一方で、特定の文化的集団内ける差異や多元性には十分な配慮が与えられていない。彼の立場は、異なる文化の尊重という姿勢が導きだされる点においてヴィーラントのコスモポリタニズム と重なるが、個と共同体とのかかわりという観点から見るならば、共同体への埋没を一貫して否定した後者とは大きく異なっているといえる。ヴィーラントのコスモポリタニズムは、共同体の中に個を埋没させない思考だった点で、文化多元主義的な言説とは明確に異なっていた。個と共同体の関係性を、愛国とは異なる視点から提示しようとしている点にこそ、ヴィーラントのコスモポリタニズムの意義は見いだせるのである。メーザーについての研究の成果は日本独文学会機関誌の国際版で発表している。（„Pluralität und Homogenität. Zur Ambivalenz der Kulturtheorie Justus Mösers“ Neue Beiträge zur Germanistik, 162）

（３）市民的公共圏をめぐる議論との接続
ヴィーラントのコスモポリタニズムに見られる、所与の社会制度を超え出ようとする「孤立」の姿勢の同時代的意義を、「言論の自由」のテーマから論じた。領邦君主の恣意的な検閲が残る時代にあって、ヴィーラントは、文芸誌を発行して自由な言論の場の育成に尽力し、その論考で言論の自由を繰り返し主張した。この主張は、彼のコスモポリタンとしての立場と直接結びついていた。すなわち、ヴィーラント の言説において「世界市民」という存在形態の道徳的な価値は、なによりも曇りのない批判性ということに見出されており、コスモポリタン的な主体は、特定の利害や立場にとらわれることのない公平な判断の主体として考えられている。そのような主体像はそれ自体虚構的なものであるが、この虚構的な主体像こそが、市民的公共圏の理念的な基盤をなしてもいたのである。本研究では、このようにコスモポリタニズムと市民的公共圏の理念とのつながりを明らかにするとともに、その可能性や問題点をより深く考察するために、ヴィーラントと似た視座を持った同時代の知識人として、イマヌエル・カントに注目した。『世界市民的見地における普遍史の理念』や『啓蒙とはなにか』などの論考を分析し、そこでコスモポリタニズムが、理性的主体による自由な発言の場という市民的公共性の理念の深化にとって決定的な意味を与えられていることを論じた。その上で、ヴィーラントやカントのコスモポリタニズムにおいて想定されるコスモポリタン的主体があくまでも「知識人」であり、その点に彼らの構想の限界があったこと、さらに、カントの『永遠平和のために』の中にはそのような限界を乗り越える契機を見出すことができる点についても論じた。この研究成果は、2021 年 6 月の日本独文学会春季研究発表会にて企画開催したシンポジウムで発表した。
このシンポジウムは、啓蒙時代から 20 世紀までのコスモポリタニズムの展開を複数の研究者で概観するという内容である。シンポジウム後に、発表者に新たな執筆者を迎えて、ドイツ語圏のコスモポリタニズムの展開を通史的にみる 8 人による共著書を企画編集した。（『ドイツ語圏のコスモポリタニズム　―「よそもの」の系譜』共和国、2023 年。）この共同研究と出版企画を通して、ヴィーラントやカントの言説を 19 世紀から現代までのコスモポリタニズムと比較し、その特徴を近代史の展開の中により明確に位置付けることができた。

以上のように、本研究では、ヴィーラントの言説分析を軸に据えて、啓蒙時代にコスモポリタニズムが批判的知識人の拠点としていかに機能したのかを明らかにし、それによって従来の「現実離れ」したコスモポリタン像を刷新することに成功した。また本研究では、所与の社会から一定の距離を保つ点にこそヴィーラントのコスモポリタニズムの中心的特徴が存在すると考えて、「孤立」や「よそもの」といったキーワードでそのコスモポリタン像をとらえたが、このように「よそもの」の観念に注目したことによって、ヴィーラントやカントのコスモポリタニズムが、19 世紀以降に強まり今なおアクチュアルな課題、すなわち「特定の社会や文化に包摂されない生のための論理をいかに構築するのか」という課題に取り組む重要な出発点ともなっていることを示すことができた。こうした本研究の視点は、「よそもの」という観点からドイツ語圏のコスモポリタニズムの歴史を論じた共著書の成果にダイレクトに結びついている。この論集は、ドイツ語圏のコスモポリタニズムを通史的にたどる日本において初めての試みである。
国境を越えた移動がますます増加する現在にあって、共生への回路を手放さないための思考を鍛え直すことは急務の課題である。ヴィーラントやカントにみる啓蒙主義的なコスモポリタニズムは、この思考の基盤として、今なおアクチュアルな可能性を失っていない。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 SUGA, Rie	４．巻 162
２．論文標題 Pluralitaet und Homogenitaet -Zur Ambivalenz der Kulturtheorie Justus Moesers	５．発行年 2021年
３．雑誌名 ドイツ文学	６．最初と最後の頁 ー
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 菅利恵	４．巻 160
２．論文標題 市民、人間、世界市民　ーヴィーラント のコスモポリタニズム と市民的公共圏	５．発行年 2020年
３．雑誌名 ドイツ文学	６．最初と最後の頁 30-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 菅利恵	４．巻 36
２．論文標題 樽の中の世界市民ーC．M．ヴィーラントの『ディオゲネスの遺稿』	５．発行年 2019年
３．雑誌名 三重大学人文学部文化学科『人文論叢』	６．最初と最後の頁 19-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 菅利恵
２．発表標題 「永遠平和」への道―ヴィーラントからカントへ
３．学会等名 日本独文学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Rie Suga
２．発表標題 Cosmopolitan Identity and the "Natural State“ ― Wieland’s "Manuscript of Diogenes”.
３．学会等名 15th International Congress on the Enlightenment, Edinburgh,（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 菅　利恵（編著）	４．発行年 2023年
２．出版社 共和国	５．総ページ数 336
３．書名 ドイツ語圏のコスモポリタニズム：「よそもの」たちの系譜	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関